エッセー

全カリ授業での〈冒険〉と〈あそび〉

経済学部教授　須永 徳武

全学共通カリキュラム（以下全カリ、2016 年度から全学共通科目）は 1997 年度にスタートしますが、その翌年に私は立教大学に着任しました。その頃から学部・学科の新設、再編が進み、現在では広範な学問領域をカバーする専門教育が 10 学部・27 学科を基盤として展開されています。それら学部・学科に拠って立つ専門教育とは一線を画し、立教大学が標榜するリベラルアーツを一貫して体現してきたのが全カリであったと思います。着任当初、全カリを自分の学生時代のいわゆる「パンキョー」（一般教養科目）と同様に考えていた私は、その科目展開の多彩さに驚いたことを良く覚えています。

全カリは、学部・学科の枠を超え、全学で支える教育プログラムでしたから、私もこれまでいくつかの授業を担当し、運営にも携わりました。専門を異にする学部学生を対象とする全カリの授業に、ある種の負担感を感じるという話も時折耳にしましたが、私自身は全カリでの授業を楽しんでいました。理由はいくつかありますが、一つは自分の学部以外の学生と触れ合える数少ない場であることです。同じキャンパスにいながら、学部を異にする学生と接する機会は思いのほか乏しく、その数少ない場が全カリの授業でした。ただ、それ以上に私が感じていたメリットは、授業での〈冒険〉と〈あそび〉の可能性でした。一般に大学教員は、所属学部において自分の研究分野に対応した担当科目が決められています。さらに、この担当科目は体系的な学部カリキュラムの構成要素として、しかるべき位相に設定されています。言い換えれば、学部の教育プログラム全体の中で果たすべき役割と責任が明確に定められた科目と言えます。また、その科目内容にしても、それぞれのディシプリンに対応して基礎から応用へと体系的に構成されるものになります。もちろん実際の授業は教員個々の裁量により行われますので、そう厳格なものではないでしょうが、原則を言えばそうなります。教室で勝手気ままに話しているように見えるかもしれませんが、専門科目の講義ではそうした外枠からの締め付けが思いのほか強いように感じます。これに対して専門教育の体系性から離れて科目が設定される全カリでは、授業の自由度が高いというのが私の感覚でした。さまざまな学部の学生を相手に、知的体系性の軛（くびき）から外れて授業できるのであれば、少し〈冒険〉と〈あそび〉をしてみようというのが、私の全カリに対する当初のスタンスでした。それが全カリの理念にふさわしかったかどうかはよく分かりませんが、教壇を降り、受講生と一体化した授業空間ができれば面白いだろうなとは考えていました。そんなことを思いながら行った全カリ授業の事例を 2 つほど紹介したいと思います。

一つは着任してほどなく担当した歴史系の科目で、小林よしのりの漫画『新・ゴーマ

ニズム宣言 SPECIAL 戦争論』をテキストにしました。戦後の歴史教育を「自虐史観」と批判する「新しい歴史教科書をつくる会」が活発に活動し、「ネトウヨ」（ネット右翼）と呼ばれる言説が社会的な関心を集めていた時期に、そうした時代の空気を「漫画」に集約することで若年層に強く影響を与えていたのが小林よしのりの『戦争論』でした。また、戦前期に植民地へ進出した企業分析を研究テーマとする私にとっても、戦争や植民地問題はその背景にある重要な論点でした。受講生の報告を軸に、受講生同士が議論する形に授業を設計しました。対立軸が明確なテーマでしたので受講生間の議論は白熱しましたが、私が心掛けた点は自分の考えで議論を誘導しない、授業内で結論を出さない、ということでした。このスタイルの授業を何年か続け、途中からは他大学の学生や新聞記者、時には中・高生（受講生のアルバイト塾の教え子）が議論に参加したり、中国や韓国の留学生が自国の歴史教科書や歴史教育を紹介したりと、刺激的な授業空間にはなっていたと思います。受講生がこの授業を通して何を得たのかは分かりませんが、単位取得後も授業に参加し続ける学生がある程度いたことを考えると、楽しんでいたのだろうと思いますし、学生の可能性を感じた時間でした。全カリの特性がこうした授業スタイルを可能にしたと思います。

もう一つは「立教 OBOG の『社長の履歴書』」という授業です。経済学部のキャリア教育の一環として部分的には始めていましたが、社会のさまざまな分野で活躍する卒業生の知見や経験を大学教育に還流させるチャネルとして、全カリに開講申請をして始めました。「社長」は一つの記号であまり意味はないのですが、旧知のサンヨー食品の井田純一郎社長（これが契機となり、現在は経済学部の客員教授に就任されています）に相談をし、12 名の OBOG 社長に学生時代の過ごし方から現況まで各回交代でお話しいただくリレー方式の授業としました。ここでも内容の規格化はせず、授業後半は社長と受講生が直接に質疑を交わす時間にするということを唯一のルールにしました。お忙しい方々なので日程調整は大変でしたが、お願いしたすべての社長が快諾で、むしろ母校で後輩たちに話せる機会を感謝されました。切り口を変えて、こうしたチャネルは拡張すべきではないかと感じています。履修登録の抽選倍率が 3 倍に近く、履修希望者が履修できない授業科目（お嬢さんが抽選に外れたとぼやいている社長もいました）もどうかと思いますが、受講生の満足度は高かったように思います。また、これは私も初めての経験でしたが、最終授業日の夜に講師の社長がポケットマネーを出し合って第一食堂を貸し切り、ビールやホッピー（ホッピービバレッジ株式会社の社長が当該科目の講師です）を片手に受講生と懇親をするのも恒例となっていました。

ここで紹介した 2 つの授業が受講生の知的向上に有意義であったかと問われれば、はなはだ心許ない気がしますが、私の〈冒険〉と〈あそび〉は、全カリという教育プログラムなしには考えられません。全カリが今後も知の〈冒険〉と〈あそび〉の基盤であり続けることを願っています。

すなが　のりたけ